

ミニチュア写真家・見立て作家

田中 達也氏

ミニチュア写真家・見立て作家。1981年熊本県生まれ。大学でデザインを学び、デザイン会社に就職。2011年からミニチュアを使った見立てアート『MINIATURE CALENDAR』を開始。以後、インターネット上で毎日作品を発表し、Instagramのフォロワーは250万人を超える(2020年5月現在)。主な仕事にNHK 連続テレビ小説『ひよっこ』タイトルバック、伊坂幸太郎『残り全部パケーション』森見登美彦『熱帯』の挿画、作品集に『MINIATURE LIFE』『Small Wonders』『MINIATURE TRIP IN JAPAN』などがある。



国も言葉も世代も超えて。みんなが笑顔になれる「ミニチュア世界」を創り続けたい。

作品を毎日ネットにアップし ふと気がいたら10年目

編 「洋服の見立てがいい」とか「医者の見立て違い」などという一般的な使い方の他に、「見立て」には、「ある物を、それと似た別の物で表現する」という意味があるんですね。だから田中さんは、単なるミニチュア写真家ではなく、「見立て作家」でもあると。

田中 庭園に、富士山に見立てた石を置くとか、おせち料理に、日の出に見立てた紅白かまぼこを入れるとか、日本人は昔から伝統的に見立てを使ってきました。このように見立てを大事にして、「物の置き換え」を「見立て」という一語で表わせる国は日本くらいではないかなと思います。ただ、物の形はどこ国でも同じようなものですし、それらが別の何かに変わっているのを面白がる感性は、世界共通なんでしょうね。

編 日常の何気ない風景に、見慣れた物が意外な形で組み合わせられている田中さんのミニチュア作品が、写真集やInstagramを通じて、日本だけでなく海外の人たちにも愛されている理由は、やはり「見立て」のセンスのよさにあるのではないですか。小さなブロッコリーが大樹になって

いたり、コッペパンが列車になっていたり。

田中 作品に、野菜をはじめとする食べ物を使うことが多いのは、世界中のみんながわかる物だから、なんです。それが、「地球に住む人は誰でも同じなんだ」というメッセージにもつながるんじゃないかなと思っています。実際、ブロッコリーを使った作品を見た海外の人たちが「あなたの国では、この野菜、何と言うの?」などと互いに確認し合っているやりとりをネット上で目にしたことがあるんですが、自分の作品がきっかけで異文化交流が生まれるなんて、なんだか嬉しいですね。

編 一つの作品を完成させてそれを撮影するというだけでも大変な作業なのではないかと思うのですが、工夫を凝らした作品を毎日Instagramにアップし続けている、というのは、ちょっと信じられません(笑)。

田中 最初はInstagramというツールが面白いなと思って、趣味で集めていたいろいろなミニチュアを並べて撮って、不定期にアップしていたんです。2011年の4月20日からは毎日アップするようになり、続けているうちに「見立て」という表現にたどり着きました。

編 始めた日付をはっきり覚えているということは何か特別な日だったんですか。

田中 ちょうど3カ月後に結婚式を控えていて、その日へのカウントダウン的な意味で毎日やってみようかなと。3カ月間続けてみたら写真集をつくりたくなって、写真集が出来たら、まだやり足りないと続けていくうちに反響が大きくなり、仕事としてやっていけるようになり、気づいたら10年経っていました(笑)。最初から「10年続けろ」と言われたらうんざりしてしまいますが、一日一日気楽に取り組んできたのがよかったのかもしれません。

編 それにしても、毎日、これほど次々とアイデアが出てくるものですね。

田中 アイデアは一日ごとに捻出すわけではなく、日頃からつねに考え続けています。買い物をしているときだったり映画を見ているときだったり。制作作業とは別のことをしているときに思いつくことが多いですね。大事なのは、思いついたその場ですぐスマートフォンにメモしておくこと。そうして溜まったたくさんのストックの中から検索していき、撮影の前日くらいに決定するようにしています。自分のサイト名が『MINIATURE CALENDAR』なので、カレンダー的な視点で季節の行事や記念日などをあらかじめ調べておいて、こういう日があるのならあのアイデアが使えるかな、これをカタチにするにはあの材料が必要だなと、前もって準備しておくこともあります。料理の献立に近いと思うんですよ。献立を考えるときに、スーパーへ行って、肉や野菜の鮮度を見たり、安売りのものをチェックしたりしながら、こういう料理にしようかなと頭に思い浮かべますよね。あらかじめ決めていた献立があっても、売り場の品揃えによって変更したり。毎日のこと、というも含め、「旨い料理を出す」と「旨いアイデアを出す」のは、よく似ているんじゃないかと思います。

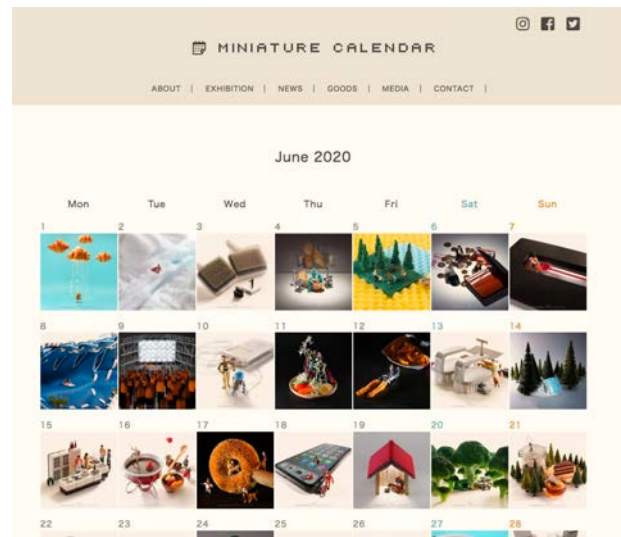
親子で共有できる楽しさ 日々の対話のきっかけに

編 段取り的には、大人視点での「毎日の料理」に似ていると思いますが、田中さんの作品は、子供心、遊び心でいっぱいですね。

田中 子供の世界は「見立て」に満ちています。「ままごと」なんて、おかずでも食器でも、見立てだらけですよ(笑)。自分も、たとえばミニカーなどを使ってあれこれつくっている最中に「昔、こうやって遊んでいたっけな」とか、忘れていた記憶が急に蘇ることもありますし、それが楽しい、というのはありますね。

編 世代によって「昔の記憶」も変わってくるのでしょうか？

田中 僕にとって懐かしさのある見立てを「斬新だ」と感じる人がいたり、逆に、これは新しい見立てだと思ったら「懐



HP:MINIATURE CALENDAR



Brottree Forest ブロツリーの森

かしい」と言う人もいます。いつ頃どんな遊びをしていたかなどによって、作品を見たときの反応も少しずつ違うんです。

編 だからこそ、親子で一緒に楽しむことができるのでしょうか。

田中 確かに、親子で楽しさを共有、というケースが結構あるんですよ。「自分のスマホで毎日インスタグラムをチェックして小学生の子供にも見せています」と、展覧会するときなどにわざわざ言いに来てくださる親御さんもいますし。そんなふうに世代を超えて親子のコミュニケーション手段にしてもらえるというのは本当に嬉しいですね。

編 ご自身の自由奔放な発想でつくりあげる独自のミニチュア作品とは別に、田中さんは、小説の挿画やドラマのタイトルバック用の作品も積極的に手掛けていますが、当

然、つくり方は変わってくるんでしょうね。

田中 もちろんです。ふだん使わないモチーフを使うことになるわけですから。挿画やタイトルバックの場合、小説やドラマの登場人物をそのまま反映できる分、人形の服装やニュアンスにも、より精度の高さが求められてきます。やりがいがありますが、大変でもありますね。

編 モチーフ選びにもかなり神経を使うのではないですか。

田中 とくに小説の挿画の場合は、その物語を読んだ人にしかわからないモチーフを使うことがあります。読んでいるうちに表紙の意味がわかってきて、読み終わったらニヤリとするような。自由につくるミニチュアだと、完結したワンシーンだけでみなさんに物語性を読み解いていただくわけですが、小説では、物語があつての挿画。作品が表紙の補足になるような感じなので、全部わかっちゃうと面白くない。ちょっと謎を残すくらいでちょうどいいんです。

編 ドラマなどの映像の中で使われるときは、時間の流れや空間の移り変わりなどが加わってくる面白さもありますね。

田中 NHK連続テレビ小説『ひよっこ』のタイトルバックをつくったときは、風景を田舎から都会に変えていくことで月日の経過を表現できました。また、畳を田んぼに見立て、そこに農作業をする人たちを配したことにより、農家で育ったヒロインの境遇を表現できたのではないかなと思います。

編 田中さんのミニチュア作品は、ドラマや小説などかなり親和性が高いように見えますね。

田中 僕自身もともと小説や映画が好きで、そこからイ

ンスピレーションとして、作品の風景や構図なんかが出てくることがすごく多いんです。これからも、小説や映画、漫画などを大事にしていきたいですし、お仕事として、いろいろなカタチでコラボしていけたらいいなと思っています。

アトリエの引き出しに 人形ストック5万體

編 ミニチュア世界に登場する人たちは実に生き生きしていますが、既製のものなのですか？

田中 メインに使っているのはドイツのプライザー（Preiser）社のものです。小さいサイズでも細かいところまでよくできているんですよ。ミニチュアとは言え、写真ではかなり寄って撮るので、ディテールがないと厳しいんです。プライザーの人形はとにかく種類が豊富で、動きの表現なんかもすごくニュアンスが出ていて気に入っています。



編 やはり、相当たくさん揃えているんでしょうね。

田中 全部で5万体的ほど、アトリエの引き出しに保管してあります。

編 5万体的!? そんなにあって、訳がわからなくないませんか(笑)。

田中 どんな顔、服装、ポーズの人形があるか、9割がた把握しています。もちろん思い出せないものもありますよ。でも、部屋の片付けと共に人形の仕分けをし直しているとき「この人形、使ったことなかったな」というのに気づくと、そこからまた新しい作品のアイデアにつながることも多いですね。片付け、整理整頓は、やらないと仕事になりません。せっかくいいアイデアを思いついても、それに最適な顔や服装の人形が見つからなければどうにもならないので。

編 人形で5万体的ということは、背景用の小道具などは、数えきれないほどありそうですね。

田中 もともと買い物好きなので、思いついたらとりあえず何でも買ってしまいます。いまはもう使われなくなったジャンク品の携帯電話でも、何となく気になったら、ネットオークションで100本ぐらいまとめ買いしたり(笑)。小道具に何種類かカラーバリエーションがあるときは、とりあえず全色購入しておきます。形状だけでなく、その色でないと表現できない情景というのが必ずありますから。

編 小道具選びの基本、みたいなことはあるんですか？

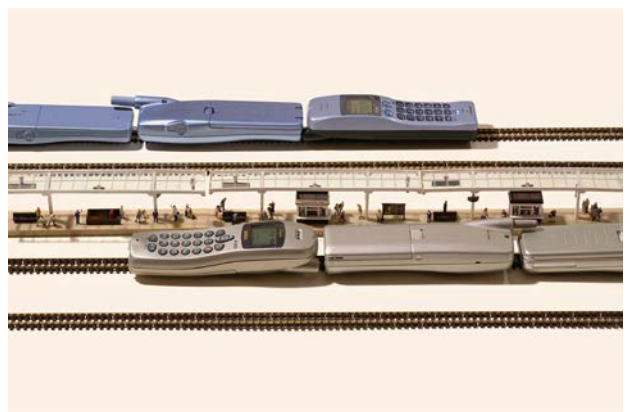
田中 背景の道具を選ぶときのポイントは、何よりも、みんなが見慣れている形であること。たとえばハサミならお洒落すぎるデザインのものより誰でもすぐ頭に思い浮かべるような、ハサミらしい形のものを選ぶようにしています。みんながよく知っているものが、よく知っている別の何かに変わっているというのが見立ての面白さの基本ですからね。

自分で考え自分で撮ってみる そんな展覧会があってもいい

編 田中さんは、ミニチュアでつくった立体の空間そのものではなく、写真を撮ったものを一つの作品としているわけですが、写真にこだわる理由は何なのですか？

田中 写真に切り取ることで、「ここから見てください」というベストのアングルを提示できるからです。たとえば、携帯電話をつなげて新幹線に見立てた作品があるんですが、適当な方向から見ると単なる携帯電話にしか見えないのに、微妙な角度でちょっと横から見ると突然、新幹線のフォルムに見えてくるんです。一度気づいてしまうと新幹線にしか見えません。その“見るべき視点”を固定した、写真というカタチが、自分の表現の完成形だと思っています。

編 とくに気に入った作品は立体のまま保管しておくのでしょうか。



Sonic Express 新幹線F203系とP201系

田中 いえ、全部崩してしまいます。スペースの問題もありますが、一旦リセットした方が、次の新しい発想が生まれてきやすくなるので。小道具類も、一つの作品の中にとどめておくのではなくどんどんと新たな作品に活かしていく方がいいんです。

編 もったいない気もしますが…。

田中 写真は作品でもあり記録でもあるので、必要になったらそれを元にまた作り直せるんです。実際、展覧会するときなどには、過去のミニチュア作品を再現して展示していますし。

編 そう言えば田中さんの作品展で、お客さんが実物を写真に撮ってSNSにアップしているのを見たことがあります。撮影OKなんですね。

田中 僕の展覧会では毎回、実物の立体と僕の撮った写真を両方展示して、お客さんにも自由に撮影してもらっているんですが、何でこのアングルがベストなのか、自分で実際に撮ってみて初めて実感できると思うんですね。僕のつくった見立ての世界を追体験してもらえると云いますか。

編 なるほど。SNSにアップしてもらえば宣伝になるから写真OK、というわけではないんですね。

田中 もちろんそれも期待していますが(笑)、それだけじゃありません。いまは誰もがスマートフォンで写真を撮ってその場でSNSにアップすることもできる時代なんだから、美術館で腕を組んで作品の前に立って静かに鑑賞するのは別に、こうして自由に動きまわりながら自分で撮って自分で考える展覧会があってもいいと思うんです。

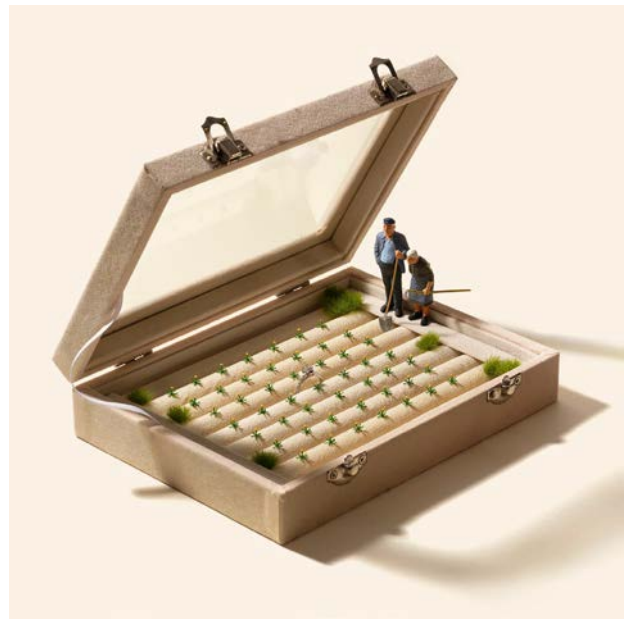
編 田中さんは、ある意味、スマートフォン時代、SNS時代の申し子のような気がします。

田中 スマートフォンがあるから、みんな毎日これだけの時間をインターネットに費やすようになったということは言えると思います。僕が毎日作品を発表できるのも、その反響がすぐにダイレクトに返ってくるのもインターネットのおかげです。こちらが発信すると相手も発信してくれる。相互的に。じゃあ頑張って続けていかないといけないな、もっと楽しいアイデアを出さないといけないなと、新たなやる気が湧いてくる。それがSNSのいいところなのかなと思います。こうして僕が鹿児島にいながら作品を発表し続けられるのも、ネット時代ならではのですね。

編 ネットのチカラと言えば、海外からの反響も大きいのだそうですね。

田中 実は、私のInstagramのフォロワーは、アメリカやヨーロッパ、台湾、韓国など、7割が海外の方なんですよ。

編 それは凄い!ただのミニチュアだったら、そこまでは広がらないかもしれません。「見立て」は国境を超える、ということですね(笑)。



Garde-ring 園芸ジリング

「よい夫婦の日」にアップされたこの作品は、Instagramで9万いいねを達成

見立てもダジャレも日本文化 独自の伝統を世界に伝えたい

編 ところで田中さんの作品には一つひとつタイトルが付いていますが、そのセンスのよさも作品の魅力を引き立てていると思います。ダジャレなんだけどベタベタじゃない(笑)。

田中 ベタすぎないダジャレの感覚は、デザイン会社にいたときに広告をたくさん見たことで磨かれたのではないかと思います。優れたキャッチコピーには、ダジャレっぽくてもひねりの効いた、絶妙なものが多いと思うんですね。ナンセンスに語呂だけを揃えるのじゃなく、その言葉の響きが見る人の心を惹きつけるような、スタイリッシュでウイット

に富んだダジャレと言いますか。

編 タイトルのキレがいいときはInstagramのコメント欄も盛り上がってますね。

田中 タイトルを発展させたダジャレをコメントして楽しんでいる人も多く、大喜利みたいになることもあります。ときには、僕よりうまいことを書いている人もいます(笑)。

編 先ほど、7割ほどが海外のフォロワーだとおっしゃっていましたが、さすがに外国のファンに日本語のダジャレのニュアンスは伝わりにくいんですよね。

田中 難しいでしょうね。それでも何とか伝わらないかなと、最近では英語のタイトルに工夫をしています。ジュエリーケースを畑に見立てた作品で、gardeningとringをかけて『Garde-ring』というタイトルにしてみたり。それが英語圏の人にどのくらい“ダジャレ的”に響くのかはわかりませんけれど。

編 そもそも「見立て」というのは、英語で何と表現するんですか？

田中 見立ての「カタチによる面白さ」は万国共通なんですけど、「見立て」も「ダジャレ」も日本固有の伝統的な文化で、うまく英語には訳せないんです。「Look like」とか「similar」とか、「似ている」というニュアンスの言葉はあるのだけれど、何かを別の何かに変換することに特別な意味を持たせている「見立て」とは違います。はじめにも言ったように、たとえばおせち料理に、金色の小判に見立ててきんとんを入れる。一方で、「まめに暮らす」に引っ掛けた「黒豆」や、「よろこぶ」に語呂合わせした昆布巻などを盛り込む。色やカタチの「見立て」も言葉の「見立て」も伝統的に受け継がれてきているわけです。普段の生活の中で忘れてしまいがちな、「日本には昔から見立ての文化があったのですよ」ということをちゃんと覚えておきたいなと思って、昨年(2019年)『MINIATURE TRIP IN JAPAN』という写真集をつくりました。

編 和の美しさに身近なアイテムが入り込んでいて、見立ての面白さが楽しめるうえに、日本文化を知るための行事や場所、物などをコラムで解説してあるのもとても印象的でした。

田中 日本独特の物や風景を選んでつくったので、海外の方が日本に興味を持つきっかけになれば嬉しいですし、観



MINIATURE TRIP IN JAPAN

田中氏の数ある作品の中から日本らしさを表現した作品をセレクト。四季折々の風物詩や風景、文化、食物などをテーマに、ミニチュアを通して海外の人たちに日本という国を知ってもらえる1冊。日本語・英語解説付き。

小学館

光で日本に来た海外の方がお土産として持って帰ってくださるという思いもあります。

批判覚悟で信念を貫き 多くの人に新たな元気を

編 田中さんのサイト『MINIATURE CALENDAR』は、その名の通り、毎日の記録としてのカレンダー式になっているのいいですね。社会や暮らしに密着したアートと言いますか。

田中 毎日やり続けているから、逆に、実際の生活と切り離すのが難しいんですよ。その時々自分が興味を持っているものや、世間を賑わせているニュースなんか、タイムリーに作品に反映しています。身近な家族からの影響も大きいですし。最近うちの息子がドラえもんにハマっていて、一緒にアニメを見たりするんですが、鑑賞中にふと作品のアイデアが浮かんできたりすることが多いんです。それで早速ドラえもんのミニチュアを買ってきて作品に使ったりして(笑)。

編 ヒントは、暮らしの中に、身の周りに溢れているわけですね。

田中 いまですと(2020年5月現在)やはり新型コロナウイルスのニュースは毎日必ず目にしますから、どうしても無関係ではられません。マスクや体温計など、みんなが日々使っているであろうモチーフを活かした作品が多くなってきます。

編 マスクを使った作品や、STAY HOMEをテーマにした作品はとてもインパクトがありましたね。

田中 マスクをサーフィンの波に見立てた作品は「みんなでこの荒波を乗り越えていこうよ」というメッセージを込



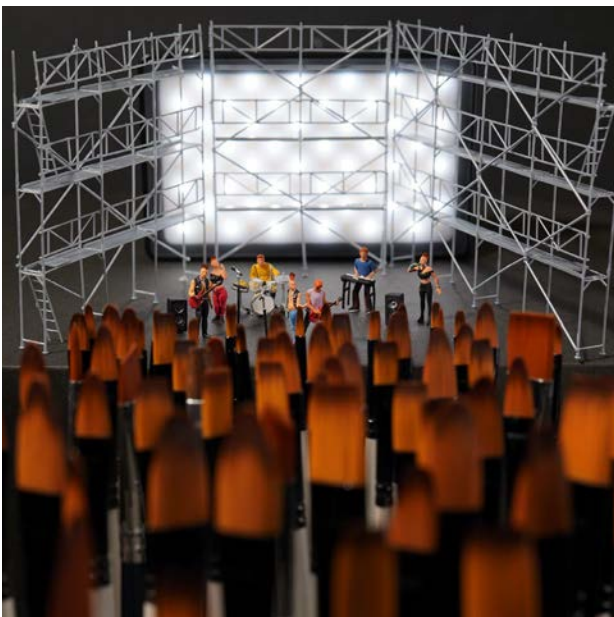
We overcome many difficulties. 荒波を乗り越えよう

めてつくったんですが、連日マスク不足が報道されている最中だったので、ある程度の批判は覚悟の上だったんですよ。案の定、「マスクを無駄にするな」という否定的な意見がたくさんきました。もちろん、マスクは撮影のあとに自分で使いましたよ。そんな批判が予想されても、僕としては、いまの時代を映し出す物、ニュースなどで毎日採り上げられる物だから、あのタイミングで「あえて避けて通ろう」という気になれなかったんです。大きく賛否が分かれていましたが、結果として成功だったんじゃないかと。当たり障りない表現より、議論が起こるぐらいの方が“いい作品”だと思っていますので。

編 どんなに辛くても、人間、何とか心の余裕、ユーモアがほしいですね。

田中 僕は、暗いまま伝えるよりも、ポジティブに置き換えて、前向きに伝えるほうがいいと思うんです。ずっと家にいることが辛いと言う人も多いけれど、家の中も面白いよということをもっと作品で表現できれば、在宅の新たな楽しさに気づく人が増えるかもしれない。あるいは、みんながいまできないこと、たとえばライブハウスで盛り上がっている様子などを作品にすれば、それを見て元気が出る人がいるかもしれない。このご時世では、どんな作品をつくっても、どこかでコロナと結び付けられてしまうでしょうから、むしろこうした特異な状況をプラスにとらえて、みんなが家にいるこんなときだからこそ、毎日見て、ちょっとでも楽しくなってもらえるような作品を休まずに発表し続けていきたいですね。先ほどもお話ししたように、僕の作品を子供と一緒に楽しんでいるというお父さ

んやお母さんがたくさんいます。だから子供に説明したくないような作品はつくりたくないですし、年齢に関係なく、国も言葉も超えて誰もがいつでも笑顔になれるような見立ての世界を、自分自身が楽しみながら創造し続けていきたいと思っています。



Mohawk 「俺たちで夢を描こうぜ!」



When is dawn? 夜明けはまだか?